
偽書 仮面ライダー THE DARKNESS

ハイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽書 仮面ライダー THE DARKNESS

【Nコード】

N46570

【作者名】

ハイド

【あらすじ】

12/8タイトルを変えました。

西暦2010年、城南大学付属高校に通う高校生「本郷猛」は、謎のテロ組織、「シヨツカー」に拉致され、改造されてしまう。改造人間となるもシヨツカーから脱出する事に成功した彼は、かけがえのない物を守るため、「仮面ライダー」としてシヨツカーに立ち向かう決意をするのであった。

EPO「序章」(前書き)

初代仮面ライダーを元にした新小説がスタート。
相変わらずのグダグダですが暖かい目をお願いします。
ではどうぞっ。

E P O 「序章」

東京・・・、大都会のネオンが光り、車が行き交う中、黒い車が走っていた。どうやらリムジンの様である。黒いリムジンの中で2人の初老の男が話をしていた。

「先生、明日の会議・・・、先生の一票で日本の経済地図が大きく変わりますよ」

その男の言葉に『先生』と呼ばれた男はああ。とうなずく。どうやら会話の内容からしてこの『先生』という男は政治家で、もう一人の男は秘書のようである。

「膿は出さねばならんと言う事だな」

そう言った瞬間である。

ガァン！！！！

リムジンに衝撃が走り、車は止まってしまふ。

「どうした！？何事だ！」

男はリムジンの運転手に声をかける。

「わ、わかりません！いきなり車が止まってしまいました・・・」
プシュツ！ピチャツ！

運転手が現状を報告しようとした所、突如蜘蛛の巣のような網らしきものがリムジンに張り付く。

「な、何だこれは！？」

うるたえる政治家、ふと、秘書は窓の外に何かがある事に気づく。

「せ・・・先生・・・」

「ん・・・！？」

秘書のようすがおかしい事に気づき、振り向くと『何か』を見て凍りつく。それは・・・糸のようにぶら下がっている『何者』か・・・、蜘蛛を模した仮面をかぶり、黒ずくめのスーツをまとった『異形の者』であった。

プシュ！

「この男を……ですね。かしこまりました。このスパイダー、必ずやこの少年をとらえて来て見せましよう……。シヨツカーの名のもとに」

スパイダーはそう言うと、蜘蛛の糸を伝い、何処へと姿を消した。そして男もまた、スパイダーがいなくなるのを見計らい、何の前触れもなく姿を消したのだった……。

秘密組織『シヨツカー』……、社会を裏から操る謎のテロ組織。その尖兵として作られた『改造人間』サイボーグ達は常人を超える能力を駆使してテロ活動を執行する。

彼らは、自らの感情と正体を隠さねばならない。

そう……。『仮面』を着ける事によって……。

これは……。自分の運命を知らない少年の物語。そして……。命あるものの為に戦う決意をした少年と全ての人間に復讐を誓った少年の父の戦いの物語である……。

原作、石ノ森章太郎『仮面ライダー』×『仮面ライダー THE FIRST』&『仮面ライダー THE NEXT』
作、ハイド

THE MASKED RIDER 仮面ライダー 新世紀異聞録

E P O 「序章」 (後書き)

いかがだったでしょうか？

DVDで『仮面ライダー THE FIRST』を見ていたら、妙にこれを原作にした小説を書きたくなって、気がついたら・・・(汗)なんてこつたい。どうしてこつなった(作者の所為)

これもまた、不定期な連載となりますので皆さま応援宜しくお願いします。

それでは(owo)ノシ

EP1「起動」(前書き)

どうも、今回遂に、物語が始まります。ちょっと長いですがご了承くださいませ・・・(汗)

相変わらずのグダグダっぷりですが温かい目をお願いします。
では始まります。

EP1「起動」

赤い世界、全てが赤に染まっていた。血と炎・・・見渡す限りの赤、赤、赤。その赤い世界を6歳にも満たない少年は走っていた。怖い、怖い、こわい、こわい、こワイ、コワイ。

少年の心には恐怖しかない。ただ一心不乱に走っていた。死の恐怖から逃れたくて・・・。

- 猛・・・、逃げて・・・！

そう言い残し少年の目の前で爆発に包まれて息絶えた母親の言葉が頭の中で蘇る。泣きながら少年は走っていた。やがて、赤い世界の先に光が見え・・・、夢は覚める。

「・・・夢か・・・」

本郷家の自分の部屋の天井を見つめ、本郷猛は呟いた。いつも見る6歳だったころの記憶の夢。彼には両親がいない。10年前、父の勤めていた研究所が正体不明の爆発を起こし、職員全員が死んだ。その時、猛は母親と共に研究所に来ていた。そして・・・、その事故に遭遇し、父親も母親も死亡。ただ一人猛だけが生き残ったのである。

「割り切れたと思ったんだけどな・・・母さんの事も」

そう呟き、起き上がる猛。そんな時だった。

「猛ー、御飯よー」

「はい、今行きます叔母さん」

叔母である本郷蒔絵ほんごう まきえの声が聞こえ、猛は自分の部屋を出て、階段を下りた。

あの事故の後、猛は母がたの親戚に引き取られた。元々、父親である千里竜生ちとせりゅうせいは父親つまり猛の祖父とは絶縁状態であったためである。その為、母千里（旧姓は本郷）唯ゆいの姉である蒔絵に引き取られ

たのだ。そう言う訳で猛と蒔絵は2人暮しである。・・・話を元に戻そう。

「おはようございます蒔絵叔母さん」

「おっす。おはよう猛」

台所のテーブルに座っている蒔絵に挨拶をし、座る猛。朝ごはんのメニューは白い白米が輝くご飯に、角切りのかぼちゃが入った味噌汁、そしてスクランブルエッグであった。猛と蒔絵は手を合わせ、『いただきます』と言うと、朝食を取ったのだった。

「ねえ、猛」

「何です？」

食べている最中、蒔絵は猛に向かって口を開く。

「もうすぐ誕生日だよ。もうすぐ16・・・、あれから10年かあ・・・、時が経つのが早いもんだねえ・・・」

「そうですね・・・」

蒔絵の言葉に猛はフフ・・・と微笑みながらうなずく。あの事故以来、猛は笑顔を失った。そんな彼に手を差し伸べてくれたのが蒔絵だったのだ。現在、悪夢は見れども猛がこうして笑っていられるのも蒔絵のおかげなのである。

「そんな事よりさ。思い出に浸って言いワケ？もう学校に行く時間だぞー」

「へ・・・？あっ！！？」

蒔絵の言葉に目が点になる猛、ふと時計を見ると・・・、学校開始時刻まで10分も満たない時刻であった。

「う、うわあああああああああああっ！！！！やつばあ！遅刻するウウウウウウウウウウツ！！！！ガツガツ、モグモグ・・・ウツ！？ゲホツ！ゲホツ！」

「そ、そんなあせらなくてもいいのに・・・」

それを見た猛は血相を変えると、御飯を詰め込む。だが、それがたたってむせてしまう。そんな猛を見て蒔絵は苦笑交じりに呟いたのだった。

「ごちそうさま！それじゃあ行ってきます！」

そう言って、物凄い勢いで学生服に着替えると、バッグを持ち外へと出てヘルメットをかぶるとバイクに乗り、学校へと向かったのだった。

「はいはい、行ってらっしゃい」

そんな猛を蒔絵は苦笑交じりで見送る。だが、これが人間として猛が蒔絵との最後の会話になるうとは誰も想像してはいなかった。。。

「ふう〜、ギリギリセーフかな・・・」

城南大学付属高校、ここに猛はいつも通っている。そう呟いて猛はバイクを駐輪所へ置くと、学校へと向かって行った。

「よう、本郷。遅かったなー、ギリギリやで」

自分の教室である1年A組の教室に入ってくるなり、関西弁でしゃべる角刈りの学生服の少年が声をかける。

「おはよう鈴宮^{すずみや}。ちよつと叔母さんと話しこんじゃってさ」

猛はその少年に申し訳なさそうに話しかけ、挨拶を交わす。鈴宮ケンジ、それが彼の名前であった。猛とは、中学校以来の友人である。

「とか言っちゃって〜。また家で水の研究をしてたんだろ？」

「ちがうよ、ヨウスケ。確かにやってたのはやってたけどさ・・・、そんなに夜遅くまで見てないよ」

ケンジとは違う眼鏡をかけた少年、ヨウスケ（フルネームは相川ヨウスケ）の言葉に猛は顔をしかめながら反論する。

「んじゃあさ。猛、それを何時までやってたの？」

「大した時間じゃないよ、午前1時に行くか行かないか位までやってたんだ」

「本郷、それを夜遅くっていうねんで・・・」

「細かい事はいいの！それにヨウスケ！水を馬鹿にしてるみたいだけど、水は結構綺麗なんだぞ！結晶なんか凄く輝いていたしクドク

ドクト・・・」

ヨウスケの問いに答える猛にケンジは半眼でツッコんだ。猛、ケンジ、ヨウスケはとても仲が良く、「A組の3バカトリオ」と呼ばれる程一緒につるんでいるのである。猛達がいつもの如く、駄弁っている。

「ねえ本郷君。その水の話良く聞かせてくれない」

「・・・はい？・・・ってええ！？緑川さん！！！！」

少女の声が聞こえ、振り向くとA組のマドンナで有名な緑川百合子みどりかわゆりがいた。グラビアアイドル並にスタイル抜群の容姿に、おしとやかな性格で人気の女子生徒で、高校内ではファンクラブも作られているほどである。その彼女が猛達の目の前に、それに猛の『水』の話に飛びついてきたのだから驚くのも無理はない。

「来週書く学級新聞のネタがなくてすごく困っててさ、その水の話聞かせてくれないかな」って

「いいですともッ！！！緑川さんのためならば喜んで！と猛は言うております！」

「オイイイイイイツ！！！？ヨウスケ、何話仕切ってるのお前！

！あ・・・、緑川さん。大した話じゃないんで・・・忘れてください

「本郷、ちよつとツラかせや」ちよ！？鈴宮！？」

百合子の提案に下心丸出しで答えるヨウスケに顔を真っ赤にしながらツッコミ、話を断ろうとするも、ケンジに掴まれる。

「本郷・・・、これはまたとないチャンスやで。折角、緑川さんがお前の水の研究を新聞の題材にしてやるう言うてんねん。これに成功したらもしかしたらやけど、取材協力に感謝してお前と付き合ってくれませんかかもしれへんで。だったら協力せなあかんやろ！？」

「け、ケンジ」それで・・・どうなのかな？話は聞かせてくれるのかな」えつと・・・」

小声で猛を諭すケンジ。猛が困った顔をしていると、百合子が声をかけてきた。猛は顔を真っ赤にしながら考え込み、

「いい・・・ですよ・・・？その・・・僕の研究でよければ・・・」

百合子の取材を承諾。やった と軽くガッツポーズを取る百合子は、

「じゃあ、放課後科学室に集合ね それじゃ宜しく」

そう言つと、自分の席へと座つたのだった。一方の三人組は・・・

「どうしよう・・・」(by猛)

「ガッツや本郷」(byケンジ)

「そうだよ。きつとうまくいくさ」(byヨウスケ)

そう言つて先生に怒られるまで、ポーッと突っ立っているしかなかったのだった。

授業が終わり放課後の科学室・・・、

「わあ、キレイ」

顕微鏡で水の結晶を見ながら百合子は呟く、現在ここには猛と百合子しかいない。ケンジとヨウスケは隠れて事の成り行きを見ていた。

「水の結晶ってこんなに美しいんだね、でも驚きだね。結晶こけつってさ、周りの環境に敏感に反応するなんてさ・・・まるで生きてるみたい・・・」

「みたい・・・じゃなくて実際に生きてるんですよ。極端に言つと水の面に美しい物が映つた時、その水の結晶は美しくなるって事ですかね」

そう言つてうつとりする百合子に猛は、微笑みながら答えた。その猛の説明に百合子は感心しながら猛を見る。

「人間の体は60%が水だつて知ってます？美しい物を見ると人は元気になる・・・、それは水の結晶が物理的に変化しているかもしれない」

「じゃあさ、私達の普段の生活も美しい物に満たされれば幸せになれるってことなのかな？」

百合子の問いに猛は「そのとおりです」と答える。

「でも・・・退屈じゃないですか？研究って言っても『水』ですし・・・」

顔を赤らめながら猛は問うが、百合子はうつん。と首を横に振る。「結構、面白いよ。本郷君の話・・・、好きだな」おかげでいい記事が書けそう。所でさ、どうして本郷君はこの研究をしようと思っただの？」

そう言っただけで笑う百合子は猛にそう問いかける。猛は恥ずかしそうに頭を掻くと、ゆっくりと口を開いた。

「母さんが小さかった僕に水の結晶を見せてくれたんです。小さかった僕にはそれがとても綺麗で・・・、だからこの研究をしようと思っただけですよ」

「へえ・・・、じゃあ本郷君のお母さんは今どうしてるの？」
百合子のこの言葉を聞き、猛から笑みが消え、思いつめた表情で言う。

「・・・死んだんだ。10年前、父さんが勤めていた研究所で・・・」

「あ・・・ご、ごめん！悪い事聞いちゃった・・・」
そう言っただけで謝罪する百合子に猛はいいよ・・・と優しく微笑みながら言う。

「もう昔の事だからね。気にしてないよ。それにいつまでもクヨクヨしていたら、母さんに笑われちゃうから・・・」

「そっか・・・、頑張ってるね本郷君。私応援してるから・・・じゃあ来週の学級新聞楽しみに待ってるね」

「はい、ありがとうございます」
そう言っただけで取材を終え、科学室を出ていく百合子。そんな百合子に会釈をし、突っ立っている猛を隠れていたヨウスケとケンジが出てきて言う。

「よう、猛。百合子さん、結構お前に好印象だったぜ！」
「そ、そうかな・・・／＼／＼」

ヨウスケの言葉に、顔を真っ赤にしながら言う猛。そんな彼に何

言う тоннねん！とケンジ。

「『応援してる』って彼女が言ったんやで！？これを好印象言わんで何て言うんや！とにかくこれを祝して『アミーゴ』で祝杯や！ほな行くでー！ヨウスケ！本郷！」

「応ッ！！！！」

「ちょ！？なに二人で盛り上がったんのさ！？ちょっと待っ・・・アッー！！！！！」

猛はじたばたするも、ヨウスケとケンジにあっさりと引きずられ、喫茶店『アミーゴ』に行く事になった。

カランカラン・・・。

「「ちーっす！おやつさんいますかー？」」

「「こんにちはー・・・」」

「お？ヨウスケにケンジ。それに猛までいるのか？どうした？猛はともかくヨウスケとケンジは顔がほころんでるが、何かいい事でもあったのか？」

白を強調としたレトロチックな作りが人気の喫茶店『アミーゴ』のドアを開けた猛、ヨウスケ、ケンジを『おやつさん』こと立花藤兵衛たちばなとが迎える。藤兵衛は、3人の顔を見て、何かいい事があったのか？と問うた。

「「ええ、それはですねえ・・・」」

とヨウスケとケンジはニヤニヤしながら藤兵衛に猛の取材の事を話したのだった。

「はっはっは、成程。猛お前にも遂に春が来たかあ」

「いや・・・春というかちょっと話をしただけなんですけど・・・ケンジとヨウスケから話を聞いた藤兵衛は笑いながら言い。猛は苦笑しながら反論した。

「何言ってやがる猛。お前の話を聞いて『面白い』って言ったんだろ？その緑川って子。だったら好印象じゃないか」

「そうよ タケちゃん。恋ってもんは押しの手なんだから」
藤兵衛に賛同するように、ニヨキつと女性が藤兵衛の後ろから現れる。

「うわあ!?!?美里さんか・・・、驚かさないで下さいよ!」
猛はびつくりして転げ落ちそうになり、相手の正体を見て、その女性、美里に怒鳴る。

「あはは、ゴメンゴメン・・・『ゴン!』あだ!何すんのよパパ」
「何するじゃないだろ、美里。向こうのバイク屋の仕事ほっぽり出して何してんだ」

笑いながら猛に謝罪する美里に藤兵衛は拳骨を落とした。実はこの美里、立花藤兵衛の娘であり、アミーゴの裏側にあるバイク屋『立花モーターショップ』（ちなみに猛達3人組もこの常連である）の店長でもあるのだ。あと、余談ではあるが猛の叔母である時絵と無二の親友であり、暇さえあれば一緒にツーリングしていたとか・・・。

「仕方ないでしょ、バイク屋よりそっちの方が儲かるんだから。ま、そんな事よりタケちゃんの一步前進を祝ってあげましょ」

「ったくしょーがねーな・・・。まあ、お前等もそのつもりで来たんだろうし、まあいいか。今日は貸切にしてパーツとやるか!」

美里の言葉に、藤兵衛は仕方なく言うと、『アミーゴ』のドアにかかっていた『開店中』を『本日の営業は終了しました』の札に代え、宴会が始まったのだった。

やがて2時間ぐらい続いた宴会が終わり・・・、午後8時。

「じゃ、またな」

「学校で会おうな」

「うん・・・またね」

ヨウスケとケンジに別れを告げ、猛はバイクで帰路に着く。

「はあく疲れた・・・。あいつ等といるとホント苦労が絶えないよ・・・」

バイクで走りながら猛は苦笑交じりに呟く。その呟きに誰も答え
ない。

「だけど、楽しいよな。あいつ等と一緒に騒いだり色々やったりす
ると嫌な事もすべて忘れられるんだよな……。おっといけない、
そう言えば叔母さんに今日は『アミーゴ』で宴会するから遅くなる
って電話するの忘れてた。一旦降りて叔母さんに謝らないと」

そう呟くと、バイクを路肩に寄せて停車すると、バイクから降り、
携帯を取り出す。そして本郷家の電話番号を入力していた時だった。
キキー。ガチャ……。

突如タクシーが猛の目の前に止まり、ドアを開けたのだった。

「あの……。僕バイクがあるんですが……」

そう言っただけで断る猛、そんな猛の言葉を聞かず、運転手は猛の方を
見ると、こう言った。

「おめでとございます、本郷様。貴方は偉大なるシヨツカーの
一員として選ばれました」

「シヨツカー？何を言ってるんですか？お断りします。僕そう言う
ことをしている暇はないのでこれで……」

運転手の言葉に首をかしげながらも丁寧な断り、別の場所に移動
しようとしたのだが、

「そうは行きませんよ……。力づくでも貴方をお連れしるとの首
領の命令ですからね……」

そう言いながら運転手は何か仮面のようなものを取り出し、それ
を被ると……、

「ヴー！」

いつの間にか黒ずくめのスーツを着て、蜘蛛のような仮面を被っ
た異形、スパイダーへと姿を変える。

「な、なんだ！？姿が変わった！！」

スパイダーの風貌に驚きながらも、猛はバイクにまたがり逃げよ
うとする。だが……、

「ヴー！」

プシューウ！

スパイダーの口から放たれた糸がバイクの後輪を絡めとり、動きを止める。

ガクン！

「う、ウワアアアアッ！！！！？」

いきなりバイクの動きが止まった事により、猛は慣性の法則に基づいてバイクから投げ出され、地面に叩きつけられる。

「ぐ、ガハッ！！？」

背中を強打した事によつて、肺から酸素が総て締め出され呼吸できなくなり咳き込む。おまけに頭を打つたのか上手く立てない状況にあった。そんな猛をスパイダーは担ぎ上げると、タクシーに押し込め、そのまま何処へと姿を消したのだった。

「ようこそ、シヨツカーへ」

薄れいく意識の中、猛はスパイダーがそう言ったのを聞いたのだった……。

「う……」

猛はゆっくりと目を開けるとそこは知らない天井だった。自分の部屋ではないどこか分からない天井。

「ここは……、どこだ？僕は確かヨウスケ達と別れて……そして……」

そう呟き、あの異形に気絶させられ、どこかへ連れて行かれたことを思い出す。なんのつもりか知らないが早くここから出なければ……そう思ったとき、体に妙な違和感を感じる。体を見てみると……、

「何だよ……これ……？」

そう呟き絶句した。今の猛はモスグリーンと黒を基調にしたスーツ。手足は鎖でつながれており、白いベルト、井出達であったのだ。自分の変わり果てた姿に啞然として……、

「目覚めたか」

左手の方向に男の声がし顔をそこに傾けると、黒づくめのスーツに黒いコートを羽織った骸骨のような仮面を被った男が白衣のガスマスクをつけた男達と共に現れる。仮面の男は白衣の男達に下がっていいぞといつて、下がらせ、猛の前に立つ。

「久しぶりだな、猛」

「久しぶり？誰なんだ・・・アンタは・・・何で僕の事を知っている!?」

「・・・やはりこのマスクでは誰だか分からんか・・・」

猛の反論に、そう言っただけで仮面の男は被っていた仮面を手にかけると、それを外す、男の素顔を見たとき猛の表情は驚愕に変わる。何故ならば、その顔は忘れるはずもない猛にとつて死んだと思っていた人物なのだから・・・、

「私だよ、猛」

そう・・・、

「と、父さん!?!?」

仮面の男は猛の父親、千里竜生だったのだから・・・。あつけに取られる猛を他所に、竜生は淡々と告げる。

「猛、これから私の言う事を良く聞け。お前は我が『シヨツカー』の一員として働いてもらう」

「ちよ、ちよつと待つてよ!何が何だか全然分からないよ!今まで連絡を入れず何をしてたの!?僕がどれだけ寂しい思いをしたか分かっているのかよ!」

父の言葉に納得できず反論する猛、だが、

「今はお前が知る必要はない。黙って私の言う事を聞いていればいい・・・。『シヨツカー』の一員となって世界に全てに復讐をするのだ」

「嫌だ!復讐つて何だよ!?何をするつもりなんだ!」

首を縦に振らない猛に竜生は冷たく見下すと、

「もついい・・・、お前には失望した。命令に背く馬鹿など『シヨツカー』には必要ない。脳手術を始める」

そう言い放つ。それと同時に、白衣を着たガスマスクの男達が現れ、なにやら機械を取り出すと、猛のこめかみに当てる。

「何をする気だ・・・やめろ！」

「始める・・・」

猛の制止も空しく、竜生の一言で脳手術が始められようとしていた。その時だった。

ブツン！

突如、停電が起こり真つ暗になる手術室。うろたえるガスマスクの男達。そんな中、竜生が無線を取り出し、連絡を取った。

「どうした？何があつた！？」

「侵入者が発電機を・・・特攻服を着た女に・・・ギャアッ！！？」

無線そこで無線が途切れ、舌打ちをする竜生、守りを固めろ！とガスマスクの男達に指示を出そうとするが・・・、

「オオラアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

バゴオオオオオオン！！！！

裂ぱくの気合と共にドアが破壊され、とある人物が現れる。暗がりではあるが猛はその人物を見て驚く。

「猛の帰りが遅いと思つてGPSを頼りにやってきたらこんな事になつてるなんてねえ・・・」

「蒔絵叔母さん！？何その格好！！？」

猛の叔母、蒔絵であつた。しかもいつもの格好ではなく木刀を手に特攻服といたたいでたちであつた。

「はは、ちよつと暴走族をやつてた事があつてね。つてそんなことはさておき、早くここから出るよ！その手枷足枷をぶつ壊すから我慢してな！そりゃ！」

バキイン！バキイン！バキイン！バキイン！

蒔絵はそう言つと木刀で猛を固定していた手枷足枷を破壊すると、猛を立ち上がらせる。

「困るな、義姉さん。私の息子を連れ出してもらつては・・・」

「ハン！笑わせんじやないよ！猛の脳を弄繰り回そうとしいて何

言っただい！行くよ猛！」

竜生の言葉を鼻で笑うと、猛を連れて蒔絵は一目散に駆け出した。戦闘員たちは猛達を捕らえんと後を追う。やがて竜生だけとなった手術室。天井からスパイダーが降りてくる。

「行ってしまいましたね……。どうします？私も追いかけて本郷猛を捕らえましょうか？」

「ああ、頼む。だが、あの女のほうは殺してもかまわん」

「かしこまりました……」

竜生とスパイダーはそう会話を交わすとスパイダーは糸を伝うと上へと登ったのだった。再び誰もいなくなった手術室で竜生は一人咳く。

「猛……。仮に逃げれたとしてもお前はもう二度と普通の生活には戻れん……。もうお前の体は私達と同じなのだからな……」
と……。

「ふうー。ここに来れば大丈夫……っ」と

ショッカーのアジトがあった廃墟ビルから離れた倉庫、そこに蒔絵と猛は隠れていた。猛の着ていた黒とモスグリーンのスーツはいつの間にか消えており、連れ去られた時と同じ学生服となっていた。

「ありがとう……。叔母さん」

そう言ってお礼を言う猛に蒔絵はいいってお礼は。と言いたげに手を振る。

「アンタはアタシにとっては息子みたいなもんさ。息子を助けるのは当たり前だろ」

「……はは、そうだよね」

ウィンクする蒔絵に猛は微笑みながら答える。

「ああ、そうだ。無事に戻ったらアンタにプレゼントしたいもんが……」

何かを思い出したように蒔絵が言おうとしたそんな時、
グウ……。

と猛の腹の虫が鳴り出した。

「ははは、猛。どうやら腹減ったみたいだな。ほら、弁当」

「あ、ありがとう」

笑いながら弁当を差し出す時絵に、猛は笑いながら弁当を手に取ると食べる。時絵はお茶もどうだ。と言って水筒を放り投げる、猛はそれをキャッチしようとして、

グシャ！

「え……？」

その水筒を握りつぶした。猛は驚きに目を見開き、自分の手にある水筒を見た。スチール製の水筒は無残にもひしゃげ、キャップは空気圧により弾き飛ばされ吹っ飛んでいた。

「な……、何だよ……これ……まるで化物じゃないか……」
自分の体の異変に戦慄しながら呟く猛。

「どうした？大丈夫か？」

時絵の声に猛は体を震わせると、ううん、なんでもない。と言って潰れた水筒を隠す。そんなときだった。

「……は……何処だ!？」

「探せ！見……次第女……殺……！」

誰かが大勢で話す声が聞こえ、猛と時絵は身構える。どうやら連中はここまでかぎつけたようだ。

「まっずいな……。このままだここがばれるのも時間の問題ってヤツかね……。？猛、ここは私がひきつけとくからお前は先に逃げときな」

「でも……」アタシはちょっとやそつとじゃやらねやしないよ。すぐに追いつくからさ。いいから早く行きな。後でこの倉庫の先の公園で落ち合おうぜ」……わかった！

逃げるように促すも猛は渋る。そんな彼を諭すと、納得したのか頷く。

「ようし、いい子だ……。いいかい、アタシが1、2、3って言ったらずくに駆け出すんだよ……。1……。2……。3ッ！」

最後の戦闘員を木刀で倒し、蒔絵は一息をつく。腕や足などに多少は怪我しているものの、動けないほどではない。自分の怪我を確認し終わると猛と合流すべく、彼が走った方向へと向かった。

合流場所の公園に向かうと猛がベンチに座って待っていた。猛は蒔絵を見るなり、顔を輝かせながら蒔絵に歩み寄ってくる。

「叔母さん！無事だったんだ・・・」

「悪いい、猛。遅く・・・!?」

心配そうにしている猛に笑いかけようとした矢先、蒔絵は見失ってしまった。蜘蛛の仮面をつけた男、スパイダーが配下の戦闘員と共に、木に隠れて猛を狙っていたのを。

「叔母さん？どうし早く逃げる！猛イ！」

不思議そうにしている猛の言葉を遮り、蒔絵は叫ぶと猛に覆いかぶさるように抱きしめる。その時だった。

ドシュー！ドオン！ドオン！ドオン！

「グ・・・ガハッ!？」

針が刺さる音と同時に銃声が響き、蒔絵の苦悶の音が猛の耳に届く。

するり・・・、ドサツ。

次の瞬間、蒔絵の体が地面に倒れ伏す。

「叔母・・・さん・・・」

猛は倒れている蒔絵を見た。彼女の中心には赤い池が出来ていた。その瞬間、猛は悟った。叔母は自分を助けるために盾になったのだと。

「叔母さん!!!!!!」

猛は叫びながら蒔絵の体を抱き起こす。蒔絵は弱弱しく目を開けると、猛の方を見ると。

「たけ・・・し・・・、大丈夫みたいだ・・・な・・・良・・・か
つた・・・」

「そんな事より自分の心配しろよ！僕の心配なんかしなくたって・・・」

わせながらゆつくりと構える。

「殺すッ!!」

そう叫ぶと同時に戦闘員に飛び掛る。

「と、捕らえる!早く本郷猛を捕らえるのだッ!!」

スパイダーは慌てながらも戦闘員に指示を飛ばす。猛を捕らえるべく、麻酔銃を構え猛に狙いを定めようとしたその時、

「フン!」

グシャア!

猛の渾身のストレートが戦闘員の一人の顔面を捉え、風穴を開ける。血と脳漿が弾け後ろにいた戦闘員に降りかかる。

「ヒ、ヒイイイイイイイ!!!!」

その戦闘員は完全に腰を抜かし、慌てて逃げようとするが・・・、
「逃がすか・・・」

「うが・・・げ!?!」

猛の無慈悲なる手刀により、頭を割られ絶命する。

「あ・・・あああああ・・・」

「う、うわあああああ・・・バケモンだ・・・」

「ひ、ひいいい・・・こんな聞いてねえよ・・・」

圧倒的な猛の強さに戦意喪失気味の戦闘員達、だが、それを猛は見逃さなかった。

「何処へ行く?」

驚異的な脚力で、戦闘員達を飛び越すと、目の前に立ちふさがる。

「ま、待てよ・・・。あの女を殺したのはスパイダーさんだ。俺達じゃねえ!だから見逃してくれよ!なっなっ!!?!」

そう言っただけ命乞いをする戦闘員。だが、猛は答えようともせず、ただ戦闘員を見ている。

「俺達はアルバイトで戦闘員このんをやってたんだ!やりたくてやったわけじゃねえんだよ!だから見逃してくれ!頼むこの通りだ!」

そう言っただけガスマスクを脱ぎ、戦闘員達は一気に土下座をする。
だが、

グシャッ！

「ブギエ！？」

「ふざけるな・・・『バイトだから』？『やりたくなかった』？・・・
だったら最初からやるなよ・・・この糞カス共がア！！！！」

「・・・ひ、ヒイイイイイイイ！！！！！！！！！！」

戦闘員の一人の頭を踏み潰し、怒りを露にしながら叫ぶ猛。それを見た戦闘員達は恐怖に駆られ逃げようとするが腰を完全に抜かして、身動きが取れない状況である。そんな戦闘員達を猛は一人ずつ確実に殺していく、頭蓋を砕き、心臓を引きずり出して握りつぶし、首をねじ切り、脊髄を引きずり出す。それはまるで一方的な虐殺であつた。

「ルアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

ゴグシャア！

「ギヤバ・・・べ！？」

最後の戦闘員の顔面を拳で粉碎した後、猛はスパイダーに向き直る。

「恐ろしいやつめ・・・」

スパイダーは心底恐怖していた。怒りに任せて戦闘員を殺している猛の狂気とも言えるほどの憎しみの強さに・・・。

「だが・・・、俺は戦闘員なぞ我がシヨッカーでは最下級の存在ではない！行くぞ、本郷猛！ヴー！！！！」

そう叫ぶと共に、毒針を放つスパイダー。・・・だが、

「フッ！！」

猛はそれを手刀で難なく払う。

「ぐっ！？ならば・・・接近戦で！！」

スパイダーはそう叫ぶと猛に接近し、拳を突き出した。だが、それが誤りだつた。

ガシッ！

「なっ！？」

猛はスパイダーの左ストレートを無造作に受け止めると、

グシャア！

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

そのまま握りつぶす。スパイダーの左手は原型をとどめぬほどひしゃげており、所々に骨が突き出していた。

「・・・」

ボツ！

「ひ、ヒイ！？」

無言で突き出される猛の正拳それをあいている右手で受け止めようとすると、

ドグチャー！！

「う、うわあああ！！！俺の右手がアアア・・・ガッ！？グヴォア！！」

猛の拳はスパイダーの手をまるで紙のように貫通させ、腹を打ち抜く。仮面の奥で白目を剥き、鼻から口から胃液を出すスパイダー。そんなスパイダーを見て、猛は冷静に、そして冷酷に止めを刺そうとする。

「終わりだ・・・！」

そう言つて、拳を振り上げ止めを刺そうとする猛。だが、

「ぐっ！し・・・死ぬっ！本郷猛！」

プシューウ！

そう言つてマスクの口から糸を吐くスパイダー。糸は猛に絡みつき、もがけばもがくほど糸はこんがらがっていく。

「くっくっく・・・、どうだ？この殺人ネットの味は？こいつは貴様もがけばもがくほど首を締めるのだ。俺の勝ちだ、本郷猛！！フハハハハハハハハハ・・・」
「ふん！『バリッ！』」
「は？」

勝利を確信したスパイダーだったが、造作もなく猛はそのネットを？ぎ取る。突然の出来事に啞然とするスパイダー。

ザッ・・・ザッ・・・ザッ・・・。

「ひ、ヒヤアアアアアアアアア！！く、来るな・・・来るなア

改造人間、本郷猛の孤独な物語はこうして起動したのだった・・・。

続く・・・。

EP1「起動」(後書き)

いかがだったでしょうか？冒頭の部分・・・特に百合子の取材シーンは『The First』を何回も見直し、それなりに再現しました。あつてるか心配ですが・・・。

そして、改造されて第三者の協力を得て脱出するシーンは原作を参考に、その為、猛君の叔母の蒔絵さんが犠牲に・・・(汗)そして、残虐すぎる1号無双。書いていて自分でも震え上がりました(オイ作者)

さて、そんなことはさておき、叔母を失った猛は果たして立ち上がれるのか？それは次回にて、では次回予告行きますよー。

次回予告

叔母を失い泣き疲れ果てて眠ってしまった本郷は病院で目を覚ます。失意のどん底に叩き落された本郷を立花親子が親友が見舞いにやって来る。彼らの励ましによって本郷は笑顔を取り戻していく。だが、次なるシヨツカーの刺客『バット』が現れ、病院は混乱状態に。迎撃に向かう本郷の表情は憎しみと狂気に満ちていた。

次回、THE MASKED RIDER仮面ライダー新世紀異聞録『憎悪』にご期待ください。

美里「それじゃあ次回も・・・サービスサービスウ」

それでは(owo)ノシ

EP2「憎悪」(前書き)

今回は、猛の変身態の名称が明らかになります。果たして叔母を失った悲しみから立ち直る事が出来るのか？！

猛「THE MASKED RIDER 始まります」

EP2「憎悪」

少年は虚ろな目で虚空を見上げる。傍らには自分の叔母の死体が横たわっていた。流す涙は既にかれ、少年は疲れ果てて地面に仰向けになる。冷たい夜風が吹きすさぶ。

騒ぎを聞きつけ、近所の住人らしき人物がその光景を発見。悲鳴を上げる。その悲鳴から次々と人が集まり、やがて、サイレンが鳴り響くと同時にパトカーと救急車が駆けつけてくる。

担架で運ばれていく中、虚ろな少年の瞳にはキープアウトとかかれた黄色いテープと警察の姿だった。

「叔母さん……」

少年、猛はそう呟くと、意識を失った……。

「……」

猛が無言で目を開けると、白い空間であった。何も無い真っ白な空間。起き上がりあたりを見回す。どうやらここは病院のようだ。

その証拠に左腕付近に点滴が付けられてある。

「夢……なのかな……?」

そう思ったかったが、不意に両手に感触が蘇った。……シヨッカー戦闘員をこの手で殴り殺した感触が……。引き裂き、八つ裂きにした感触が蘇る。そして……。叔母が自分の腕の中でだんだん冷たくなっていく感触も……。

「やっぱり……。夢じゃなかったんだ……。フッフ……。」

そう呟き自嘲気味に悲しげに笑う猛。そこへ……。ガララ……。

病室のドアが開き、2人の男が入ってきた。

「貴方は?」

「本郷猛君だね?警察だが……。3日前の殺人事件の犯人の顔は見たのかね?」

「犯人の・・・顔？」

「そうだ。君の叔母さんを殺した犯人だ」

どうやら警察のようである。聞き返す猛に、警察の一人が頷きながら答える。

「辛いのは良く分かるが・・・、君だけが頼りなんだ。どんな些細な情報でもいい・・・何か知らないか？」

「・・・化物です・・・叔母さんを殺したのは・・・」
「化物？」

猛の答えに警察は眉をひそめながら聞き返した。猛はうなずきながら答える。

「ええ・・・叔母さんを殺したのは化物ですよ・・・」

そんな猛の言葉をもう一人の警察が、そんなものいるか！と声を荒げた。

「それくらい知っているだろう！真剣に考えろ！」

そんな彼を警察は押しとどめ、猛に向き直ると、囁くように言った。

「何でもいいから手がかりをくれ。犯人は誰だ？顔を見たのか？覆面をしていたのか？何処まで目撃したんだ？」

・五月蠅い・・・。一人にしてくれよ、頼むから・・・。

猛はそんな警官達を見て、心の中でそう呟く。無視し続ける猛にその警官は業を煮やし猛の肩を掴んで揺さぶりだす。

「おい！頼むから何か・・・」

その警官の態度に猛の我慢が限界に達しようとしたその時だった。
「そこらへんで勘弁してやれよ」

男の声が聞こえ、一斉に振り向く。そこにいたのは男であった。
初老の男。猛にはその男に見覚えがあった。

「おやっさん・・・」

『アミーゴ』の店主、立花藤兵衛であった。

「な、何ですか！？捜査の邪魔ですよ！この少年だけなんです、唯一の手掛かりは！」

警官はそう言うが、藤兵衛は警官に歩み寄りながら言う。

「ふーん……。まあ、あんたらの言う事もっともかもしれないが。あの事件があった後だ。誰だって話したくはないと思うぜ」

そう言うて、ポケットからパイプを取り出し、火をつけ、ふかしながら続ける。

「現にあんたらの所為で猛もかなり参ってるしよ。今回はこの辺にして、また別の機会にしてくれ」

「……、失礼する」

藤兵衛の言葉に根負けをし、警官達は去って行った。そんな警官達を見送り、猛は藤兵衛の方を向き直り、お礼を言う。

「あり……。がとう……。ございます。おやつさん」

「まーいいってこった。困った時はお互い様だしよ」

ウインクしながら答える藤兵衛。ふと、時絵が死んだ事を思い出し、暗い表情となる。

「だが……。唯に続いて時絵までが死ぬなんて信じられないなあ……」

なぜ、時絵と唯を知っているのかと言うと、唯と時絵は小さいころに両親を亡くしており、その為立花家へと引き取られることとなった。藤兵衛は、彼女達を美里と同じ実の娘の様に育てていたため、死んだ事がショックでならないようだ。

「でも……。お前だけでも無事でよかったぜ猛」

ポン、と猛の肩に置かれる藤兵衛の手。それは凄く温かく、傷ついた猛の心を癒してくれた。自然と涙が溢れる。叔母の死でかれたと思っていた涙がまるで湧き水のようにあふれ出てくる。

「おいおい、泣くなよ。お前らしくもない。ほら、ハンカチやるから顔をふきな」

そう言うて苦笑しながら藤兵衛は猛にハンカチを渡す。猛は頷くと、ハンカチで涙を拭いた。そこへ、

ガラガラ……。

「おう、美里か……」

「美里さん……」

美里も病室へ入ってくる。藤兵衛と猛が彼女の方へ向くと、彼女は軽く手を挙げ挨拶をした。

「大変だったねタケちゃん」

そう言つと、近くに置いてあつたイスに腰かけ、猛を見る。猛はうつむきながらうなずいた。

「だけど、いつまでもクヨクヨしちゃいけないよ。つらくても悲しくても前を向いて歩かなきゃ」

「前を向いて……ですか？」

猛は顔を美里の方へ向けながら問いかける。うなずく美里。

「その後……これっ！」

そう言つて悪戯っぽく笑つと美里はいきなり猛をくすぐりだした。

「わ！？だっひゃっひゃっひゃ！！！？何するウツヒヤツヒヤ……んですか、美里さ、ゲラゲラゲラゲラ！」

くすぐられ身を擦じらせながら笑い転げる猛。美里はくすぐるのを止め、ウインクをしながら答えた。

「今みたいに、笑う事も大事よ。タケちゃんは笑顔が凄く似合うんだから、ね。『何やってんだこのバカ！』つてあだ！？何すんのよパパ」

「お前な……、ここは病院だぞ。少しは自重しろ」

言つと同時に藤兵衛から拳骨を食らわされ、涙目になりながら反論するも、反対に怒られてしまうのだった。

「ぷっ、ふふふ……あははははははは！」

それを見て猛はおかしそうに笑う。心底面白そうに。それを見て美里も「あ、やっと笑った」^とと言いながら笑う。たちまち病室は笑いに包まれ、猛は再び笑顔を取り戻したのだった。

その後の夜。

「色々貰っちゃったなあ……」

ベッドの隣におかれたたくさんの果物や贈り物を見て、猛はそう

呟く。その後、ケンジやヨウスケを初めとした学校の友人が見舞いに来たのだ。その時にプレゼントされたのである。今はもうその友人達も帰り、今は猛と藤兵衛、美里のみである。藤兵衛はイスに腰掛け、腕を組みながら寝ており、美里は開いているベッドを借りて寝ていた。

「そう言えば明日、退院なんだよな・・・早く寝ないと・・・」ガララ・・・ん？」

そう呟き、猛は明日の退院に備えて寝ようとしたその時、病室のドアが開く。そこから現れたのは看護婦であった。

「あ、消灯時間過ぎているのに寝てなくてすみません。今寝ます・・・」

猛は看護婦にそう言いかけ、看護婦の様子がおかしいことに気づく。彼女の顔面は蒼白となっており、目はうつろ、そして紫色となった唇を震わせており、普通ではなかったのだ。

「一体どうしたんですか!？」
「あ・・・うあ・・・た、助けて・・・蝙蝠みたいなのが・・・いきなり現れて・・・先生達を吸血鬼に・・・うつ!?!?・・・」

猛の問いかけに、看護婦はしどろもどろで答え、突然頭を押さえた。そして、

「ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」
牙をむき出しにして猛に襲い掛かった。即座に組み伏せられる猛。「うわっ!?!?糞!離れ・・・」

そう言っつて拳を固め、殴ろうとしたが、ふと昨日水筒を握りつぶした事を思い出す。握力があれ程まで強化されたとすれば、腕力も強化されているはず・・・、もしそれで看護婦を殴れば・・・間違いなく看護婦を殺してしまう事になる・・・。そう考えた猛は思わず手を引っ込めてしまう。

「グワワッ!」
その隙を逃さず、看護婦は牙をむき出しにすると、猛を噛み付く口を近づけた。その時、

ガン！

「グエツ!？」

看護婦は鈍器のようなもので殴られ、気を失う。一体誰が・・・その答えはすぐに声で分かった。

「大丈夫か？猛」

「おやっさん！」

藤兵衛であった。どうやらさっきの騒ぎで目を覚ましたようである。

「何か騒がしいと思っておきたら、この有様だ。一体どうなってるだ？」

「さあ・・・、とりあえず、美里さんを起こして病院から出ましよう」

問いかける藤兵衛に猛は首をかしげながら答える。美里を起こし、病室から出ようとするが・・・、

「な、そんな!？」

「おいおい・・・、バイオハザードかなんか!？」

「え!？これどうなってるの!？」

目の前の光景を見て、三人は愕然とする。何故なら廊下一杯に吸血鬼化した人間が蠢いていたからだ。逃げ道などどこにも見当たらない。正に四面楚歌であった。

(どうする・・・、どうすればいいんだ)

猛は廊下を埋め尽くす吸血人間を見ながら心の中で考える。ふと、脳裏に自分の変身した姿を思い浮かべた。あのスパイダーを倒し、戦闘員達を蹂躪した姿を・・・、だがその考えを振り払う。

(駄目だ!あの姿はおやっさんや美里さんに見せるわけには行かない!それにここの人たちはみんな誰かに操られてるんだ!だけど・・・どうすれば・・・)

そう心の中で葛藤しながら猛は考える。ふと、窓の外を見て、あることを思いついた。

「おやっさん・・・、美里さん。ちょっと僕に捕まってください」

「ホッパー」に出会えるとは……」

拍手と共に、芝居かかった口調が聞こえる。3人が振り向くとそこにはシルクハットを被り、黒いタキシードを着て、黒いマントを羽織った男が立っていた。

「シヨツカー……だと……!?」

男の話を聞いていた猛は『シヨツカー』の単語を聞き、目を大きく見開いていた。沸々と彼のシヨツカーに対する怒りと憎しみの炎が静かに湧き上がっていく……。

「何なんだ……? お前……シヨツカーにホッパー? 何のことを言っただ？」

そんな猛の様子など知らず、藤兵衛は男に聞く。男は拍手を止め、おっと失礼。と謝罪をした。

「自己紹介が遅れました……、私……シヨツカーの……」

そう言うと同時に、男の姿が変わる。黒づくめのスーツにマント。そして蝙蝠を思わせるような仮面を被った異形が立っていた。

「バットと申します。……さあ、来なさい! 戦闘員達! この3人を捕らえるのだ!」

「「「イーーーーー!」」」

異形、バットがそう言うと同時に戦闘員がどこからともなく現れ、猛達を囲む。

「ヤバ!? 囲まれちゃったよどうするのタケちゃ……!?!」

慌てた様子で猛に言う、美里は猛の顔を見て、凍りついた。

「ん? どうした? 猛がどうかしたのか……!?!? 猛……お前……」

異変に気づき、藤兵衛も猛の顔を見ると、顔を青ざめさせる。何故なら……、

「くく……ふふふ……シヨツカー……シヨツカーだと!?!? くくく……アハハハハ!?!?!」

怒り、憎しみを瞳に宿し、口元を歪めて嗤^{ワラ}っていたからだ。もは

踏もなく殴り飛ばしたのだ。

「き、貴様ア！話を聞いてなかったのか！？私を殺せば5分以内に全ての人間が「ああ、聞いてたよ」ゴバツ！！？」

バツトの言葉を遮り、今度はバツトの腹に蹴りを入れるホッパー。「要は殺さなきゃいいんだろ？・・・ビルスがあるなら血清もあるはずだよねエ・・・。僕が考えていたのは『いかにお前を半殺しにして血清を手に入れるか』を考えていたのさ・・・ククク・・・さて、答えてもらおうか？血清のありかを・・・」

「ひ、ヒイツ！来るな！！！！」

そう言うと、仮面の奥で唇を歪めながら笑みを浮かべ、バツトにじり寄る。その恐ろしさにバツトは顔面蒼白で、マントを使って飛び始める。

「逃がすかよ・・・美里さん、バイクの鍵を！」

「え！？あ、うん！」

ホッパーの指示に、美里は戸惑いながらも自分のバイクの鍵をホッパーに渡す。それを受け取ると、エンジンをかけ、バツトの後を追うのだった。

「ヤツは・・・何処だ？」

バツトが降り立ったと思われる。病院近くの墓地にホッパーは来ていた。バイクから降り、あたりを見回す。

「キエエエエエツ！！！！」

「ぐあっ！？」

突如、雄叫びと共に、バツトが奇襲をかけ、ホッパーの後頭部を殴る。よろめくホッパーは反撃するが、再びバツトは姿を消してしまふ。

「ヒエヒエヒエ、馬鹿め、私は貴様より遙かに暗闇を見る事が出来るのだ。こうして、お前が私を探している中でも、私はお前の首をいつでも狙っているのだ！さあ！死ぬがいい、本郷猛！」

再び、奇襲を仕掛けるバツト。今度は素手ではなく、腕について

を睨む。そんなホッパーにバットは恐怖し、命乞いをした。

「それじゃあ、血清は？」

「私のスーツの胸ポケットだ。それ一つで病院内の人間どもは全て治る」

バットの言葉通りに探ってみると、『血清』と書かれたボトルがあった。それを手に取るホッパーを見て、バットは言う。

「さあ、言ったぞ……。早く私を助けてくれ……」

だが、返ってきたのは残酷なものであった。ホッパーは血清をバイクに置くと、仮面の奥で唇を歪ませながら言う。

「ああ、ありがとう……。じゃあ死ね」

そう言っつて、近くにあった墓の十字架を引き抜き、バットにじり寄る。

「そ、そんな約束が違うッ！」

バットは後ずさりしながら叫ぶが、ホッパーに鼻で笑われた。

「……おかしなことを言うね。自分を知ったら？そんな美味しい話があると思っつたの？アンタみたいな外道ヤツにさ」

「やめる……。止めるオオオオオオッ！！！！」

ドシユッ！！！！

そう言っつて、十字架を振り上げるホッパー。何とか逃げようとするも、それはバットの心臓を貫通していた。断末魔の悲鳴も上げられず絶命した。それと同時に泡となり風に乗っつて何処かへと飛んでいく。

「僕も……。死んだらこんな風になるのかな……。？」

バットの最後を見届け、ホッパーは無表情でそう呟くと、血清を持って病院へと向かったのだった。

怒りと憎しみに身を任せ戦い続ける改造人間ホッパー。本郷猛。

果たして彼はこのまま憎しみと怒りのままに戦っつて血と殺戮、そして復讐の修羅の道を歩むのか？それとも人類の希望の為に戦っつ正義の道へと進むのか？それはまだ誰にも分からない。

続
く
・
・
・

EP2「憎悪」(後書き)

いかがだったでしょうか？

失意のどん底に落とされた猛を救ったのは藤兵衛さんと美里さん。彼らの活躍(?)によって再び猛に笑顔が・・・、だが、そこへシヨッカーの襲来。再び猛は復讐の魔神となって戦う事となります。今回は、戦闘員達をぶっ飛ばしたり、バットの腕や足を折ったり、命乞いをないがしろにしたりする。ホッパー(ライダー1号)の描写に力を注いで見ました。気がついたら、ライダーではなく八カイダーっぽくなってしまいました・・・(汗)そんな事はさておき、次回予告です。どうぞ。

改造人間バットを倒し、病院の人々を救った本郷猛は、美里、藤兵衛にシヨッカーの事、自分が彼らに改造をされた事、叔母がシヨッカーに殺された事を洗いざらい話す。全てを知ってもなお、猛を受け入れる藤兵衛親子。そして、叔母に託されたあるものを猛に渡すのだった。

次回、EP3「形見」にご期待ください。

美里「次回もサービスサービスマ」

そう言う訳で、今回はあの仮面ライダーになくはならないあの『嵐』の名を冠したマシンが登場する予定です(ネタバレ自重)お楽しみに。

それでは(owo)ノシ

EP3「形見」(前書き)

今回、「THE MASKED RIDER - 仮面ライダー新世紀
異聞録」から「偽書 仮面ライダー THE DARKNESS」
に変え、最新話を投稿しました。

タイトル改名後の記念すべき投稿なのに戦闘シーン皆無ですいませ
ん(土下座)

あいかわらずのグダグダっぷりですが温かい目をお願いします。
それではどうぞ。。。

EP3「形見」

日本の何処かにあるシヨッカー本部……。会議室らしき所で、
童生をはじめとした何人も男女が座っていた。ナチスのような軍
服を着た男、白いタキシードを着て黒と赤のマントを羽織った白髪
の男、ファラオが被るような帽子のようなものを被り、同じがらの
タイツにマントという奇抜な格好の男、黒づくめの軍服にローマの
戦士のような甲冑を被った男。そして、白衣をまとい、椅子にチヨ
コンと座っているこの場に場違いな10歳ほどの少女。彼らはシヨ
ッカーの幹部なのである。

「コードネーム『ホッパー』こと本郷猛の捕獲に失敗し、貴重な改
造人間である『スパイダー』、『バット』を失ったそうだな。プロ
フェッサー・デス」

「申し訳ありません……。首領……」

童生の言葉に、申し訳なさそうに頭を下げる白いタキシードにマ
ントの男こと、プロフェッサー・デス。そんなプロフェッサー・デ
スを少女がフォローする。

「まあ、そう言う失敗もあるさ。ボクらだってホッパーがあればど
の性能を見せるなんて想定外だったからさ……」

「うむ、初香殿^{はつか}の言う事も一理ある。まさか、ホッパーが戦闘訓練
を受けている『スパイダー』と『バット』を葬るとは思っていなか
ったからな。これも奴に内蔵されてある『ゼノドライブ』の力と言
う訳か……。敵ながら見事なものだよ」

少女、初香の言葉に黒づくめの軍服を纏った男は頷く。今度はナ
チスの軍服風の男が口を開いた。

「しかし、本郷とやらも終わつたな。改造人間は周期的に血液交換
をせねばならん……。放っておけば拒絶^{リジエクション}反応を起こして死ぬだろ
うよ」

ナチスの軍服の男の言葉に、奇抜な格好をした男が反論する。

「だが、カーネル・ゾルよ。私は裏切り者を野放しにするほど気は長くはない。それは首領も同じ事だ……。ホッパーを……。本郷猛を倒せる性能を持つ改造人間を早く作るのだ！」

「ミスター・ヘル。その件に関してはボクに任せて。いい考えがあるから」

初香の言葉に、奇抜な格好の男、ミスター・ヘルはほう……。と頷く。

「いい考えとは何なのだ？」

「簡単な事だよ……。『目には目を歯には歯を』つまりもう一体のゼノドライブを搭載した改造人間を作ってソイツと戦わせればいってことさ。ちょうど試作型のゼノドライブを作り上げた所だからね……。被験者はボクの部下が名乗り出てくれたよ」

初香の言葉に成る程な。とナチス服の男、カーネル・ゾルは頷く。「確かそいつの名は一文字隼人とだったな……。柔術、合気道の達人であったな。首領、もしかすれば彼女の部下なら本郷を倒せるかもしれない」

カーネル・ゾルの言葉に竜生は頷くと、初香の方へ向く。

「初香君、ホッパーの件は任せよう」

「は、仰せのままに」

竜生の言葉に初香は頭を下げながら答える。それに竜生は頷くと残りの幹部に声をかけた。

「お前達は『計画』の進行を継続させる。優秀な人材を引き入れシヨッカーの戦力にするのだ……。『復讐』の為にな……。」

「……はっ、かしこまりました首領」「……」

竜生の言葉と共に、幹部達は頷くとその姿は消えそして部屋は再び闇に包まれた。

「……」

「……」

「……」

バットとの戦いの後、喫茶店アミーゴのカウンターで猛達は黙ったまま座っていた。帰ってからと言うもの会話は全くない状態である。何故そうなったのか？その原因を猛は十分知っていた。

(・・・原因は僕か・・・)

怒りと憎しみに身を任せ籐兵衛と美里の目の前でホッパーへと変身。そして戦闘員を惨殺してしまったのだ。本郷猛じゅんという異形の化物。そんな存在に恐怖を抱くのは無理はない・・・。そう考えていると・・・、

「なあ猛・・・」

重苦しい沈黙の中、口を開いたのは籐兵衛であった。はい・・・。と猛は消え入りそうな声で答える。

「お前のあの姿・・・一体何なんだ？それに・・・あの『シヨツカ』って連中は・・・」

籐兵衛の問いかけに猛は答えるかどうか考えていた。これは自分の問題なのだ。籐兵衛や美里を巻き込む訳にはいかない・・・。自分の所為で蒔絵の二の舞にさせる訳にはいかないのだ。だが、自分がいくら嘘をついた所で籐兵衛は真実を知ろうとし更に危ない目にあうかも知れない。

「・・・分かりました。全てを話します」

彼の性格を知っている猛は観念し、全てを話す事にした。

「なるほどな・・・、そう言うことだったのか・・・」

「酷い・・・自分の子供を改造するなんて・・・」

全てを話した後、籐兵衛と美里は悲痛な面持ちで言う。猛はそんな二人を無言で見ると、イスから立ち上がり、出口へと向かっている。

「おい猛！何処に行くんだ！？」

籐兵衛の言葉に猛はゆっくりと振り向き、悲しく微笑みながら答える。

「・・・僕はここに居てはいけない。いたらおやつさんや美里さん

を巻き込む事になるから・・・」

「そ、そんな！どうして!?!」

美里の問いに、おぞましい物を見るかのように自分の手を見ながら続ける。

「おやつさん達も見たでしょう？僕のあの醜い怪物の姿を・・・戦闘員達を無残に殺していく姿を・・・、もしかしたら今度は戦いのときにうつかり貴方達を殺してしまうかもしれないんだ!・・・だから・・・」

「馬鹿野郎ツ!!!」

猛に籐兵衛がストレートを喰らわせる。突然の事でかわす事もできず、床に叩きつけられる猛。籐兵衛はそのまま猛の胸倉を掴み上げあらん限りの声で叫んだ。

「だから・・・なんなんだ!?!そのまま戦いもしねえでシヨツカーから逃げる気か!?!またあんな事態があっても目を背ける気なのか!?!」

物凄い剣幕の籐兵衛に猛は驚きのあまり何も返せなかった。それにな!と籐兵衛は続ける。

「猛、お前が怪物だろうがなんだろうがお前はお前だろうが!?!ちよつとぐらい姿が変わったぐらいで悲観的になるんじゃないやねえよ!?!そんなんじゃない、死んだ時絵も浮かばねえぞ!」

籐兵衛はそう言つて、胸倉から手を離し猛の肩に置くと優しく諭した。

「いいか。お前が改造人間になつた事をプラスに考えるんだ。神様から力を授かつたつてな、シヨツカーをぶつ潰すための力を授かつたつて考えればいいんだよ」

「・・・力・・・」

猛は目をしばたかせながら自分の手を見る。

「そうだ、力だ。あの『シヨツカー』とやらの化物を倒せるのはお前一人だけなんだ。そのお前が弱気でどうする!?!守れなかったもんを嘆くより今いる守れるもんを守り通せ!」

「守れる・・・モノ・・・」

籐兵衛の言葉に、猛はハツとした。それと同時に脳裏にケンジやヨウスケ・・・友人の顔が浮かび上がる。そうだ・・・、僕が戦わなきゃ叔母さんだけじゃない・・・、ケンジ達も失うことになる・・・。どうしてこんな簡単な事に気づかなかつたのだろう・・・。そう思い、猛は拳を握り締める。そこへ、

「あ・・・そうだ。さっきの事で言い忘れてたけど、タケちゃんに渡したいヤツがあつたんだ」

声が出たので籐兵衛と猛は振り向くと美里であつた。

「渡したいもの？」

「うん。ついて来て」

猛の言葉に美里は頷くとカウンター側のドアを開け、アミーゴの裏にある立花モーターショップへと向かう。猛は美里の後を追い、モーターショップに向かう。

「こつちこつち」

ショップのメンテナンス室から美里が顔を出して、手招きをする。それに誘われ入ってみるとそこには白いボディに赤いラインの入ったバイクがあつた。

「これは・・・」

猛は目をしばたかせながら、そのバイクに触れる。そこへ、驚いた？と美里が笑いながら近づいてきた。

「コイツは時絵と一緒に作ったバイクで『サイクロン』って言うんだ。名前の由来は昔、時絵アイツと一緒に入っていた暴走族のチーム名から取つただけで、かっこいい？」

「サイクロン・・・」

美里からバイク、サイクロンの名を聞き、それを呟きながら猛はまじまじと見つめる。

『無事に戻つたらアンタにプレゼントしたいもんが・・・』

ふと時絵の言葉が脳裏をよぎり、猛はハツとなった。そうか・・・、叔母さんがいつていたのはこの事だつたんだ・・・。不意に涙が

溢れるが、猛はそれを拭う。そして、美里に向き直ると、微笑みながら言った。

「ねえ、美里さん。乗ってみていいかな？こいつに・・・」

猛の言葉に美里は目をしばたかせたが、すぐに微笑んでいいよと頷いた。

「乗ってあげなさい、それならこの子も蒔絵も喜ぶだろうし」

「・・・はい」

蒔絵の言葉に猛は頷くと、ヘルメットを被り、サイクロンを噴かせ外へと出た。

夜風が身にしみる街中を1台のバイクが走り抜けていた。そう、サイクロンである。その圧倒的なスピードに道行く人は、驚愕し立ち止まっていた。

「す・・・すごい速さだ。さすが叔母さんと美里さんが作ったって事はあるな」

猛も例外に漏れず、そのスピードに驚いていた。ふと、蒔絵の顔を思い出し、表情が沈むが、それを振り払うように頭を横に振る。

「いけないな・・・、こんなのじゃ叔母さんに笑われちゃうよ」

そう言っって苦笑する猛。その顔はもう迷いと絶望の表情は全くない。希望に満ち溢れた表情となっていた。走らせていくうち、ふと猛は蒔絵と一緒にいる感覚にとらわれた。

『大切な人はたとえ死んでも心の中にいつもいる』

ふと猛はそんなことを思い出した。いつから覚えたのか分からない、漫画の中のセリフからかもしれないし、友達との会話で聞いたのかもしれない。それを思い出し猛はフツと笑いながらバイクのエンジンを噴かせる。

「ねえ・・・叔母さん。感じる？僕が受けている風の強さを、そして風の音を・・・」

そう言っって心の中にいる叔母に話しかけながら目を閉じる猛。

「僕は感じるよ。目を閉じれば風の息遣いが、声が聞こえてくる」

目を開き、猛はスピードを上げる。

「もう逃げないよ。．．．僕は戦う。もう二度と失いたくないから．．．僕はシヨツカーを．．．父さんを止めてみせる。だから、僕を見守って．．．叔母さん」

異形であるという悲しみと苦しみを乗り越え、美里から受け取った時絵の遺産『サイクロン』を受け取りシヨツカーと戦う決意をした本郷猛。その先にあるのは希望か？絶望か？それを知るものはない。

つづく．．．。

EP3「形見」（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回、籐兵衛の説教&嵐の名を冠するライダーの相棒「サイクロン」の登場ですが、思いのほかグダグダになってしまいました（汗）やっぱリリアスものを書くのは難しいです（涙）

ちなみに、今回のショッカー幹部達の会話で出てきた『ゼノドライブ』、これは物語の鍵を握るキーアイテムです。どういうヤツなのかは劇中で明らかにしたいと思えますのでお楽しみに。

今回は戦闘シーンがなかったのですが、次回から白熱そしてバイオレンス満載なバトルを用意しますので、楽しみに待っていてくださいね。では次回予告どうぞ。

ショッカーと戦う決意をし、学校へ戻った本郷猛は百合子から相談を受ける。なんでも、ストーカーの被害にあっているようで猛は友人のケンジにそそのかされボディガードをさせられる羽目となってしまう。だが、ストーカーはショッカーを知ろうとする者を消すために作られた改造人間『スコープオン』であった。

一瞬の隙をつかれ百合子は猛とはぐれてしまう。そんな百合子に迫るスコープオンの魔の手。果たして猛は間に合うのか？

次回、偽書 仮面ライダー THE DARKNESS『名前』にご期待ください。

美里「次回も、サービスサービスウ」

それでは（owo）ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4657o/>

偽書 仮面ライダー THE DARKNESS

2010年12月9日11時10分発行